

目次

- 金田明大 「CEDACHが目指すもの」
事務局 「石巻文化センター図書カード撮影終わる」
近藤康久 「CAA 2012参加報告」



●CEDACHが目指すもの

2011年3月11日、私達は深い悲しみと恐怖に襲われました。

巨大地震とそれによって引き起こされた津波、また原子力発電所の事故によって、東日本の多くの地域が甚大な被害を受け、多くの方が命を落とされ、また今も様々な問題と葛藤しながら日々を過ごされています。

この大規模な災害に対して、多くの人々が立ち上がり、再び活動をはじめています。罹災された方は自らの生活や地域の復興のために。そして国内外の多くの人々がその支援のために。度重なる災害に対して先人達がそうしてきたように、今を生きる私達も歩みを続け、そしてこの経験を次世代に繋ぎ、よりよい生活をおこなう糧としていくことが大切と考えています。そして、このような災害はいつ、どこにでも充分おこることです。

私に何ができるのでしょうか。悲しみや不安の中、様々な考えが頭をよぎりました。決して冷静でも、論理的でもない判断であったのかもしれませんが、やはり文化財の専門家として、できることをしなくてはいけない、そう考えました。命を守る役割の方々が自らの専門に依拠して命を守ることに尽力される姿を拝見し、数は少なくとも、やはり自らの専門を通じた部分で寄与することができれば、と考えました。ネットワークなどで連絡を取り合い、同様の思いを共有した方々と、この組織を立ち上げました。

私達は、現地での活動を中心にせず、文化財を守る様々な活動に資する支援を多方面で考えていくことを活動の基軸としました。情報の集約、現地での活動の技術的な支援、専門や立場を越えた幅の広い研究者ネットワークの構築、専門的な支援と支援者の方々とのマッチングといった特定の立場や組織に依拠しない柔軟な活動を続け、また防災遺産学として、地域の文化財を災害から保護し、また災害から学ぶ活動を推進していきます。遠隔地でも、何かできることを、という方々の参加を得て、罹災された、また現地で活動されている方々と連携をとりつつ、仲間としてできることに手を差し伸べ、支えることが大切と考えています。従って、どちらかという目立たない存在であるかもしれません。しかしながら、これらの

活動は不可欠でまた重要なものと考えています。

この組織の名称は、田辺征夫前奈良文化財研究所長につけていただきました。現状、まだまだ名前にふさわしい組織ではないかもしれませんが、継続的に息の長い活動を続けていきたいと考えております。是非御支援や御参加をお願いいたします。（金田）

●石巻文化センター図書カード撮影終わる

ボランティアは引き続き募集中！



先月号でお伝えしましたように、CEDACHでは現在石巻文化センター（宮城県）の図書カードをお預かりし、図書館機能の再建支援を目指して、カード情報のデジタル化に取り組んでおります。その最初の工程となる図書カードの撮影は、4月26日、5月10・17・24日の4日間、のべ28人の方に参加していただき、完了することができました。平日にもかかわらず呼びかけに応じて大手前大学史学研究所（兵庫県西宮市）までお越しくくださったボランティアのみなさまに改めてお礼申し上げます。みごと皆勤賞を達成した方や和歌山から駆けつけてくださった方もありました。カードリングに約200枚ずつ束ねられた図書カードの撮影は、めくっていく人・シャッターを切る人という二人一組で行い、慣れてくると1台のカメラで4000枚以上を撮影していた日もありました。最終的な撮影総数は19,299枚です。

画像の撮影と並行して、データの入力作業も始まっています。撮影された画像データはインターネット上の各



撮影作業の様子（画像提供：清野）

種オンラインサービスを利用して管理しており、インターネット回線に接続されたコンピュータとブラウザがあれば、ご自宅にしながら、画像を閲覧し、一覧表に必要な項目を入力していただくことができます。5月30日現在で入力ボランティアの登録をして下さった方は33人（のべ作業人数45人）で、既に入力を終了したカードの束は16束（約3,100枚）となりますが、なお入力すべきカードの束は90以上残っており、まだまだ多くの方のご支援を必要としております。事務局までお申し込みいただければ、折り返し詳しい作業手順などについてご案内させていただきます。お近くの方にも参加を呼びかけていただければ幸いです。

また、入力が完了したものについては、撮影画像ではどうしても判読しにくい文字など実際のカードと照らし合わせながら校正・点検を行っております。校正会場は大手前大学史学研究所です。当面、毎週木曜日を作業日としますが、軌道に乗れば適宜みなさまのご都合のよい曜日・時間帯に拡大していきたいと考えております。「木曜は都合が悪いけれど、他の曜日なら大丈夫」という方も、ぜひご連絡ください。みなさまのご参加をお待ちしております。（事務局）

—入力ボランティアに参加して—

初めはカードに書かれた情報を淡々と入力していましたが、次第に筆跡に関心が移り、1枚1枚カードに記入されていった人々のことに思いを巡らせるようになりました。どんな環境で、どんな仲間とカードを作成したのか想像しました。黙々と記入したのかな（時には雑談しながら？）、エプロンを身につけて書いたのかな、正職員さんかそれとも非正規雇用の人たちかな、など思ったり、ところどころで使用された修正液にも人柄を感じたりもしました。私は入力作業を通して、カードの向こうに「人」を見たのです。そういう機会を得たことをありがたく思っています。（室山）

●CAA 2012参加報告

2012年3月26日から30日にかけて、イギリスのサウザンプトン大学にて、考古学コンピューティングと定量分析の国際会議CAA 2012 (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology) が開かれました。理論考古学や考古情報学の本場、イギリスでの開催ということもあり、450名以上の研究者が参加し、400本以上の研究発表が行われました。CEDACHでは、トヨタ財団プロジェクト支援システム班（近藤・阿児・藤本・清野・山口・魚津・金田）の連名で、“From system to society and safety: Twelve months of Consortium for the Earthquake-Damaged Cultural Heritage of Japan”（システムから社会そして安全へ：被災文化遺産支援コンソーシアムの12か月）と題する口頭発表を行いました。

この発表は、“Spatial Data Infrastructures (SDIs) in archaeology and cultural heritage: achievements, problems and perspectives”（考古学と文化遺産における空間データ基盤：到達点と問題点、今後の展望）という分科会に割り当てられました。発表では、東日本大震災の概要とCEDACHの設立経緯から説き起こし、東北各県の埋蔵文化財空間データ基盤の現状について概観しました。次いで、具体的取り組みとしてCEDACH GISと現地GPS講習会、石巻文化センター図書資料データベース復元の取り組みについて紹介しました。最後に、震災から学んだ教訓として、文化遺産それ自体も、写真や書類その他のアーカイブも、空間データ基盤も、そしてどこに何があるか知っている担当者その人すら、突然の災害で失われてしまうということが、本当に起こったことを強調し、物理的なデータバックアップと人的ネットワークの形成が大切であると説いて、発表を締めくくりました。質疑応答では、会場から、CEDACH GISが基盤データの一つとして用いる全国遺跡データベースの遺跡位置情報に、たとえば点が県外に表示される（図1）というようなエラーが含まれる理由について質問があり、データベース作成時の入力エラーの可能性が高く、CEDACHで精度検証を行う必要があると答えました。全体として、震災直後に緊急ポスター発表をおこなった前回大会（2011年、北京）に比べ、震災復興に対する国際的関心は薄れているように感じました。国際社会に向けた継続的な情報発信の必要性を実感しました。

（近藤）

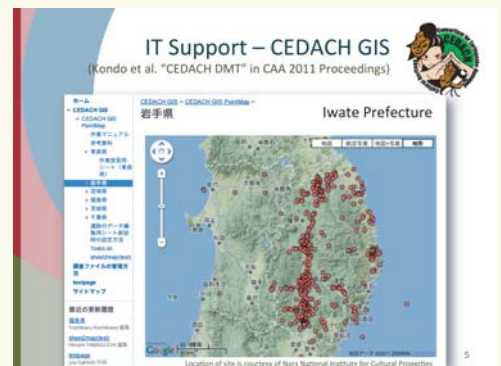


図1 遺跡を示す赤い点が沖合にも

CEDACH ニュースレター Vol.02

2012年6月8日 発行

編集・発行

CEDACH 広報チーム

〒662-0965 兵庫県西宮市郷免町 8-17
大手前大学史学研究所内 CEDACH 事務局

TEL : 0798-32-5007

FAX : 0798-32-5045

E-mail : info@cedach.org

URL : http://cedach.org